

《展望》或る編集者の戦後

白井吉見

展望

一月號

筑摩書房

編輯者
月刊號

或る
編集者の
戦後

白井吉見

創世記

《展望》 或る編集者の戦後

昭和五十二年十一月二十五日 初版発行

著者——臼井吉見

装本——郡 幸男

撮影——柴田七三三

発行者——細宣尚孝

発行所——株式会社 創世記

東京都港区元赤坂一―四―二 赤坂パレスビル

電話東京（〇三）四七八一―〇二一

振替東京三一―六二二四二

印刷——日本製版株式会社

製本——小高製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©一九七七年 検印廃止

定価は箱・帯にあります

人間の回復——一

農民文学について——五

言葉の奪還・詩の復活——一一

現代と古典——一八

・短歌的なるものへの訣別——二四

国字問題——三一

『聖ヨハネ病院にて』——三七

新教育指針について——四四

小泉八雲の『或る女の日記』——五一

『偏奇館吟草』——五七

堀辰雄と『花あしび』——六五

ある獄中詩集について——七一

プロレタリア文学の人間解体——八〇

空しき祈り——八六

知識人論——九三

文学史の課題——一〇〇

第二藝術論議——一〇六

椎名麟三氏へ――	一一五
露伴の死――	一二二
志賀直哉と織田作之助――	一二九
正宗白鳥――	一三六
野間 宏の『暗い繪』――	一四三
西鶴と織田作之助――	一五〇
唐木順三の三木清論――	一五七
横光利一の死――	一六五
『細雪』の谷崎潤一郎――	一七三
菊地寛の死――	一七九
伝統とは何か――	一八七
過去と再現――	一九四
藤村作『舊主人』の問題――	二〇一
笑いのゆくえ――	二〇八
二葉亭四迷の悲劇――	二一六
『家』の島崎藤村――	二二五
中島敦の文学――	二三三

出 隆の哲学慢談――	二四二
『藏王』にことよせて――	二五一
記録文学とモデル問題――	二六一
文芸書の売れない理由――	二七〇
芭蕉プチブル問答――	二七九
『キティ颯風』をめぐる――	二八八
窪川鶴次郎の短歌論議――	二九五
三代文豪展――	三〇三
『山びこ学校』の問題――	三一―

人間の回復

昭和二十一年二月

一億総懺悔というのは、敗戦直後まず言い出された言葉だ。これは必ずしも己の責任をくらまそうとする意図から出たものとは言えぬ。こういう場合に於ける、こういう言葉の提出は日本文化の根源に根ざしている。わが国文化の歴史で、真の対立がついぞ生れたためしなかった。ぎりぎりの対立関係に於て、新しいものが古いものを絞め殺すことによって発生し進展するという文化の歴史をわが国は殆ど経験したことがなかった。対立者に向かつて、忽ち惻隱の愛情を濺ぐことによって一種の調和状態を醸し出すことがくりかえされた。そこには真の批評がなく、批評がつねに鑑賞のかたちで立ち現れた。千年の歴史をもつ短歌が近代的小説形式と同居して愈々榮えている所以であり、鼓、三味線が管絃樂と共に存し、自然崇拜の原始的神道が近代の所産たる軍隊と結合する所以である。和辻博士の所謂日本文化の重層性がこれであるが、日本文化の特質にはちがいないが美点とは言えまい。一億総懺悔はマッカーサーの一喝を食って消え失せたが、文化の領域に於ても責むべきものを決して容赦してはならぬ。新しい文化の性格を明確にするためには、残酷苛烈に責めぬかねばならぬ。

「灰燼の街を歩きながら、私のまづ感じたところを率直に言へば、いめたといふ感じでした。し

めたものだ。——私は心にかう叫びながら思はずほくそ笑ひいたしました。」亀井勝一郎『日月明し』の一節である。「植民地まがひの難屋が悉く消滅して」、「到るところの焼跡に立派な石燈籠が残つてゐる」からだという。こんなに早く敗けようとは知る由もなく、こういう御世辞をふりまいたであらうが、こんな褒められ方もあるかと流石の戦争も氣まりが悪かつたであらう。口を開けば近代の病弊を言う。日本のどこにいつ近代があつたか。現前の悲惨と不幸は、日本に遂に近代のなかつたところに根ざしているのだ。それにしても、この薄汚い文章に、『日月明し』と題したのは洒落のつもりであらうか。そしてこういうのは何の病弊というべきであらうか。

戦争中、真に悲劇的なりし文化人果して幾許ぞ。東湖の「天地正大之氣」まで持出して、モラリツシュ・エネルギーなどとルビをふり、侵略戦争合理化をやつた高山岩男の如きは師匠西田博士晩年の悲劇的面貌とは完全に無縁である。戦争という人類最大の悲劇の中にあつてこれを悲劇とさえ感じない者が何で哲学者の名に値するか。まさに哲学の浪花節化というべし。ここ数年ほど哲学が樂天的だつたことを見たことがない。彼の痴呆狂信の徒の擯斥ひんせきを買つたからとて誠実の証とはならぬのだ。

作家にしても、酒の飲めぬ苦痛ぐらいは人並に味わつたであらうが、真に深傷を負つたものが幾人いるか。思いつきの貸本のあがりにはくそえんでいた文士だけを輕蔑することは出来ぬ。現

実に傷ついた作家の誠実のみが現実を描き得るのであり、現実に傷ついた作家の胸裏にのみ新しい人間像は結晶するだろう。さもない限り、いかに執筆の自由を回復したところで新聞記事まがいの作品以上は期待できない。

船橋聖一の小説『散り散らず』は、浅草の古い紅商、右原屋の明治大正にかけての消長を描いている。ところで、この作品の構図は、右原屋の主人公たる老女が、疎開先で、姪である養女に自家の消長を思い出として語るというかたちになっている。この思い出の部分は、筆力が冴え、コクのある味わいを見せており、まさしく小説であるが、疎開先の場面は記事を出ない。特に婿の浩二郎の如き、影の薄いこと幽霊以上である。なぜ思い出の部分だけを取り上げたのはなぜなのであろうか。疎開先での若干の消息を記者的筆致で申訳的に添えねばならなかったのはなぜであらうか。思うに作者にとって、過ぎ去った古い時代が慕わしく、又これを描き得るある程度の筆力もあるのだが、現前の苛烈な現実を無視して、一途に過去の追想にのみ没頭するだけの作家的度胸がないのだ。つまり色気があるのだ。さればとて今日の新しい現実を全体的に捉えるには非力であり、第一興味もない。これが、このような古い世界と現代の一片との抱き合せという、この作品の構図を成立せしめた根拠であるのだ。そして、ここに同時代同系統の作家の悲劇がある。

「戀闕の悲情」とか、「悲願」とか、「慟哭」とかいふ名科白めいせうびやくを歌いつづけた保田與重郎を開祖とする、かの多情多恨の宗徒の近況や如何。天皇制の是非が批判の嵐に曝され、君らの樂しげに歌いあげた（まことに樂しげであつた！）これらの科白に現實的地盤の与えられた今日、もはや吾々はいかなる「慟哭」、「悲願」がどこから起ってくるかに耳を傾けているのだ。もとより君たちは「慟哭」を歌つたのであり、ふりまわしたのであつて、自ら慟哭しなければならぬ責任はない。安心するがいい。この「慟哭」は案外君たちの侮蔑した庶民のなから聞えてくるかも知れぬのだ。

人間不信——これは敗戦によつて齎された最も深刻なものの一つである。人間信頼の回復されぬところに民主主義の出発さえもない。薄手の啓蒙屋が現れて、政治もジャーナリズムも賑わつてはいるが、こういう啓蒙の喋々から人間再建が出発するとは思えぬ。絶望と苦悩のどん底から、それにのみ生きるより他にすべのない誠実が、主体的根源的な情熱として立ち上らぬ限り、人間信頼の回復はない。かかる誠実に出発しない文学や哲学などを飢餓に直面している民衆の誰が信ずるものか。

農民文学について

昭和二十一年二月

敗戦後の文学が、その母胎である社会なみに急激な変転を見せる筈はないが、少なくとも農民文学に関する限り決定的な変貌を遂げるにちがいないまい。

伊藤永之介は東京新聞に書いている。

「当面の仕事としてはやはり農民の現實の姿を描いてみたい。私が東京で考へてゐた農民と、田舎に腰を据ゑて目前に見る農民の姿との間には、多少の喰ひちがひがあつた。いや、田舎に住んでみて、逆に農民といふものが分らなくなつた。……都會人は、農作物の闇値が無暗に上がり飢餓が迫ると共に急に農民を利慾と利己主義の塊りのやうに看倣すやうになつた。……しかし、そんな我利我利亡者が農民の本當の姿であらうか。戦争の犠牲を最も多く負擔し、その血の出るやうな勞苦の生産物を、最も安く供出してきた農民が、そのほんの一部を闇値で賣つたからといって全體的に見て、他の階級以上に利得してゐるなどとは、到底言へるものではない。さればと言つて、このごろの農民は、素直に同感を寄せ得る存在でもないやうである。いつたい農民の本當の姿はどこにあるのであらうか。」

伊藤氏の『鶯』其他鳥類ものと呼ばれる一連の農民小説は、「農民といふもの」がわかつていると考えたところから生れたものであり、描かれたのは、「東京で考へてゐた農民」であつた。警察署とか、停車場のような特定の場所を設定して、さまざまの農民を登場させ、彼等の無智と貪慾と惨めさとの醸し出す悲喜劇を手際よく構成して見せたものだった。惨めで愚鈍なものをひどく派手な、氣の利いた方法で構成して見せたところに、氏の所謂鳥類ものが一時の魅力を持ち得たのである。従つて、一度こういう構図と方法が成立すると、その場所を変え、人物の種類と組合せを変えると、また一つの小説が出来上るわけで、一連の鳥類ものが次々に制作された所以である。

然し、「農民といふものが分らなくなつた」現在、伊藤氏はもはやこういう小説は書けなくなつたのであり、こういうものが書けなくなつたところに、真に氏の農民作家としての出発があるといえるだろう。言つて見れば、「農民の現實の姿を描いてみたい」という氏の期待を實現するには、「農民といふものが分らなくなる」ことが必要であり、「いつたい農民の本當の姿はどこにあるのであらうか」と疑ふところからはじめることが是非とも必要になつてくるのである。

こう考えてくると、農民文学といったところで、結局人間を描くことに於て、その他の文学と何の差別もないわけで、伊藤氏が農民というものが分らなくなつたのは、結局人間というものが

分らなくなったのであり、「いつたい農民の本當の姿はどこにあるのであらうか」と求めるのは、人間の本當の姿を求めるのと些かも変りはないわけだ。つまり農民を描くことは結局人間を描くことだ。多くの作家が、この自明の理を自覚し得なかったところに、単に田園情緒的なものの持ち出しであったり、美化され、修飾され、或いは多くの場合歪曲誇張されて、農民の類型の常識的抽出に終った根柢があるのではなからうか。「他の階級の人間以上」に「私慾と利己主義の塊り」でもなく、「さればといつて」「素直に同感を寄せ得る存在でもない」のは、何も農民に限ったことでなく、商人、勤め人、軍人、役人みんな同じことだ。今度の戦争によって、まず人間の無智、醜惡、卑劣、惨めさ、馬鹿馬鹿しさ、お人善し、人の惡さ、無邪氣さ、いじらしさ、間抜け、抜け目なさ、狡猾、善良、一切合切刺すところなく、ぶちまけられた。この人間の奇怪さをまずつかまなくて、農民なるものだけを探しまわっても無駄であらう。農民の特性の根底に、それよりずっと根強い人間の性格が横たわっているのだ。農民を描くことのむづかしさは、この人間の奇怪を描くことのむづかしさにまずかかっている。このむづかしさを自覚しないところに、眞の農民文学が生れる筈はない。

敗戦後の今日、農村の相は決定的に一変しつつある。「東京で考へてゐた」農村的なるもの——暗さと惨めさと無智と貪慾と反抗との地盤であつたその封建的環境は急激に崩壊しつつある。従来の農民小説に描かれた地主も小作も消滅しようとしている。西鶴の筆法で行くと、今日とはもはや「天下の農民」である。この場合最も大切なのは、従来の農民小説作家の制作上の手がかりと

されていたものが悉く消滅しようとしていることだ。

反抗を唯一の手がかりとした小林多喜二の『不在地主』は文学史的意義とともに、もはや社会経済史の資料となりつつある。

島木健作の『生活の探求』が、もとより農民小説でないことは題名の示すとおりであり、作品の主人公を、農村という実験室におしこめることによって、知識的青年の生き方を探求しているのであるが、この作品に描かれている限りに於ては、農村は実験室としての機能を發揮しているとは言えぬ。井戸改修、田植、灌漑、祭礼、宗教的行事、御座、茸狩、開墾、粃摺、小作米納入、煙草納入、村の床屋、糞尿汲取等農村生活の点を順次に展開して、その点景の傍へ主人公をつれ出し、そこで洩らす主人公の若干の感想に、青年の生き方の最も重要な部分を説明させるという極めて素朴な方法が採られている。極端な言い方をすれば、主人公の感想乃至意見を述べる手段として農村的点景が持ち出されているのである。従って、この青年に於ける生き方の探求は冷酷な農村生活自体に働きかけ、働きかけられるという過程のなかに遂行されているのではなく、専ら作者の清潔な倫理的情熱によって辛うじて支持され、推進されているのである。作者自身も「彼の自己變革はまづ生産に参加する労働の過程において實現されなければならなかつた」と言っており、農村生活との対決によって現代青年を描こうとしているが、そして作者のそうした意図は極めて明瞭に描かれ、語られているが、作者の意図などは蹴散らし、ふりちぎるほどの

生々した青年自身の姿は一向に描かれていない。主人公はいつも作者の制作意図を背負い、専ら作者の情熱によつて支えられている。これは実験室たる農村が、十分自己を顕わにしていないからで、作品の背景乃至は点景としての意味を持っているに過ぎない結果になっている。作者もおそれて作品のなかに書きつけているように、主人公の「新しい生活も晴耕雨讀的なものに止まるおそれがないとはいへない」結果を齎している。率直に言えば、この退屈で拙い作品が読者の驚異的な歓迎を受けたのは、当時 に於ける知識階級の思想的彷徨のなかで、この作品の示す積極的意図とそれを支える作者の倫理的熱情と素材正直な手法とが強く人々に訴えかけたからである。

長塚節の『土』は、『生活の探求』に比べると一時代以上も過去の作品であるが、事情はかなり異なってくる。『土』に於ては、主人公である貧農の人間像を、農村生活そのものを顕わにすることによつて形成せしめている。『生活の探求』の農村乃至自然は、つねに主人公の感情を通して描かれているが、『土』に於けるそれは主人公の感情とは独立して描かれ、それを独立に描くことによつて、そのなかにのみ生きる主人公の人間像が形成される。かくて作者の觀念から離れて主人公は農村のなかに生き、そのことによつて表現の完璧が獲得されている。これは『土』の作者が『生活の探求』の作者のように、複雑な時代の觀念に苛まれることなく、一途に農民への冷酷な愛情に生き得た幸福によるものであらう。『土』の作者は何等の觀念にも憑かれること

なく、農民への冷酷な愛情のみに頼ったので、農民を「分っている」ものとしてその惨めさなり、反抗なりを手がかりとして描くことをしなかった。『土』が歳月に褪せない大きな理由はここにあると信ずる。

ところで、農村は今後否応なしに日本再建の基底となるだろう。軍備を奪われ、産業と貿易を制限されるからには、文化国家としてしか生きる道はなく、それも農村を基底とせざるを得ないであろう。農村はもはや昨日の農村ではない。解放された喜びを真に歌い得るものは今日農民であろう。ここには大きく明るい未来の展望がある。古い制度と因襲の枠のなかで窒息していた農村が、いまその枠をはずされ、広い現実的地盤の上に、新しい秩序を作り出そうとしている。都会の知識青年と農村社会との架橋が、『生活の探求』の意図であったが、この問題は、今日いよいよ新しい時代的意義を担って吾々の前にある。

いま惨憺たる崩壊によって、奇怪な人間性の正体は残すところなくぶちまけられ、作家ならずともいやでも痛烈な人間勉強をさせられた筈だ。この奇怪な人間を凝視して解放された現実的地盤の上に、新しい秩序とモラルをうち建てることは生易しいことではない。

制度としての封建制は急速に退きつつあっても、農村は残された古いものを強く保持している。而もそれは単に古いものではない。封建的なもの、中世的なもののほかに全体として近代的な性格を強めざるを得ない。家の問題一つをとりあげても、農村に於てこそ今後最も複雑な相貌

を呈する筈である。中世的封建的性格が如何にして近代になり得るのかという点に於て今後の農村は文化日本の死活を決する実験室の役割を担っている。『生活の探求』の駿介をひきつけたような単に素朴な生産の場たるに止まらぬ。新しいモラルと新しい人間像の探求はこの実験室を避けて見出すことは出来ぬ。新しい農民作家はこの実験室を真に実験室としてとらえねばならぬ。そこには現代文学の両面たる私小説と社会小説の高い結合が見られるであろう。そして、それはもはや単に農民文学の問題ではなくて、現代日本文学の最も大きい積極的な問題となるだろう。

言葉の奪還・詩の復活

昭和二十一年三月

言葉が人間をはなれ、人間をはなれた言葉が、人間に向つて復讐する。——言葉と人間が相互に汚し合い、傷つけ合う陰惨奇怪な地獄図を所謂非常時から敗戦にかけて吾々は演じてきた。

無智と驕慢と野望の徒輩が自らを「皇軍」と呼び、その強奪と蹂躪の舞台が「王道樂土」と呼ばれ、侵略と虐殺の大賭博が、「八紘一字」と呼ばれた頃から引きつづいて、惨憺たる崩壊も「一億総懺悔」でおし切ろうとし、それは自由党、進歩党というようなかたちで現在につながっている。こうした言葉であり得ない言葉、言葉の化けものが、吐きちらされ、投げかわされながら、一つの民族、一つの国家が、まっしぐらに顛落崩壊して行つた図は、敢えて神の眼からでなくと